



Title	中国における日中戦争研究について：視点と成果
Author(s)	史, 桂芳
Citation	大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー. 2010, 2010-19, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13687
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



**Osaka University
Forum on China**

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2010-19

中国における日中戦争研究について 視点と成果

史 桂 芳

中国における日中戦争研究について*

視点と成果

2010年12月10日

史桂芳[†]

* 本稿は、2010年12月6日、大阪大学で開催した戦間期研究会における報告原稿を改訂したものである。

[†] 大阪大学・法学研究科・外国人招へい研究員（中国首都師範大学・歴史学院・教授）
（shigf525@126.com）

はじめに

日中戦争は中国で言えば、抗日戦争です。日中戦争は中国近代史の重要な一部分でもあります、本格的な研究は 1985 年から開始されました。

中国では長い間、中国近代史研究は中国共産党史と同義であり、抗日戦争も中国共産党史・中国革命史の一部と考えられていました。主たる研究内容は、中国共産党は如何にして敵の背後でゲリラ戦を遂行して抗日根拠地を建設したのか、国民党の妥協的な傾向と闘いながら、中国共産党は如何にして抗日戦争を指導し、抗戦の勝利を獲得したのかというものでした。

抗日戦争について、1949 年以前から 1978 年までの間、中国では、わずか 280 あまりの論文が発表され、30 冊の著作と関連資料を出版されただけでした。それらは、国民党の正面戦場を論じず、「消極抗日、積極反共」とか、「日本軍と戦わず、友軍を攻撃する」とか、「蒋介石は抗戦期に峨眉山(四川省)に逃げ、戦後になって勝利の果実を奪い取ろうとした」とか述べ、国民党とその軍隊の役割をほとんど評価しませんでした。これに対して、台湾方面でも中国共産党の抗戦の役割を軽視し、「游而不撃(遊して戦わず)」、「一分抗日、二分応付、七分発展(抗日は十分の一、時局への対処が十分の二、七分は専ら自身の発展をめざした)」と批判していました。このような中国と台湾の研究状況は、外国の研究者が中国の抗戦を軽視する原因になりました。

1978 年末の中国共産党の 11 期 3 中全会以降、中国の学術界は新たな局面を迎えました。抗日戦争研究は一般の中国現代史研究より少し遅れ、1985 年の抗日戦争勝利 40 周年を契機として研究のブームが起きました。研究の視角は共産党史の枠組から中国近代史の枠組に変わり、中国における日中戦争の研究は新たな研究成果を収めることになりました。

・ 中日戦争についての新視点

1985 年以来、中国における抗日戦争は新たな段階を迎えましたが、全体から言えば、以下の 6 つの新視点に注目すべきであると考えます。

第一に民族性について。かつての国内の共産党と国民党の階級闘争の視角は民族の視角に変わりました。すなわち、これまでの抗日戦争については、中国共産党の正しさと偉大さを証明するために、研究は抗日根拠地を中心に、敵後の根拠地の建設、八路軍・新四軍の闘争だけ強調し、国民党の正面の戦場における抗日闘争にはほとんど言及しませんでした。さらに抗日戦争は国民党と共産党との闘争史とみなされ、国民党軍が日本軍に遭遇するとたちまち解体し、千里の外まで逃走する(一触即潰、一潰千里)と批判されました。

1985 年以降、国民政府と国民党の軍隊は肯定的に評価されるようになり、抗日戦争の全民族性が強調されるようになりました。中国共産党の提唱した抗日民族統一戦線のもとに、当時の各党派、各民族は団結して、全民族抗戦を形成しました。こうして国民党の戦場に関する研究成果がどんどん出るようになりました(例えば、国民党の正面戦場における若干の重要な戦役の紹介など)。全民族の抗戦として、海外華僑の国内抗戦の援助、少数民族の抗戦、民族ブルジョアの資金提供なども抗日戦争研究の視野に入るようになりました。後述する広西師範大学出版社の抗日戦争叢書では、少数民族、華僑、民族ブルジョアの抗日戦争に対する貢献を論じました。

第二に国民党の抗戦の積極性について。前の問題と関連して、中国大陸では、国民党の抗戦を肯定すると同時に、抗日戦争の指導権についての論争が起こりました。いうまでもなく、国民党と共産党は抗日戦争期における 2 つの重要な党派であり、両党は自分の政権と軍隊をもっていました。80 年代以来、指導権を巡って、以下の見方がありました。

- A 中国共産党は抗日戦争の指導者である。
- B 中国共産党は政治面では指導者であったが、もちろん国民党を指導することはできない。共産党が統一戦線の政策を堅持し、国民党が統一戦線を破壊しなかったこと(統一戦線に留まったこと)が、勝利の保証となった。
- C 中国共産党と国民党の共同指導によって抗戦が遂行された。
- D 抗日戦争は民族利益という共通の旗のもとで闘われた(だれも指導しなかった)。
- E 指導権は国民党から共産党に移動した。

この指導権に関する論争は、国民党の抗戦の役割をどのように評価するのかという問題です。

論争の過程で、国民党の抗戦についての多くの論文と著作が発表されました。そのなかで国民党の持久抗戦戦略、抗戦建国綱領、戦時の経済建設、正面の戦場における若干の戦役が高く評価されるようになりました。また、蒋介石は民族主義者とされました。このように中国大陸の学者は国民党の抗戦の積極性を評価し、映画「血戦台児庄」、「鉄血昆仑関」も公開されました。

2005 年の抗日戦争勝利 60 周年で、胡錦濤は、中国共産党を抗日戦争の「中流砥柱(柱石)」とするとともに、国民党の抗戦も積極的に評価しました。すなわち、中国共産党は敵後戦場と国民党の正面戦争はともに勝利に貢献したと述べ、初期の抗戦における国民党の役割を高く評価しました。

第三に世界性について。この 25 年来、中国では抗日戦争と世界反ファシズム戦争との関連性を強調しました。中国の抗日戦争が世界の多くの国と平和人士の支援を獲得したことを強調しました。一方で、

中国人民の抗戦は世界の反ファシズム戦争を支援しました。こうして抗日戦争の世界史的意義が強調されました。中国の戦場で 100 万人の日本の軍隊が存在しましたが、それは連合国のヨーロッパと太平洋戦場に対する支援でもあります。さらに中国の軍隊は海外でも作戦を展開し、イギリスの 7000 人の兵士を解放しました。中国人民の抗戦は世界反ファシズム戦争の勝利に大きな貢献をしました。

第四に歴史性について。抗日戦争は中国近代史の軌跡のなかで、アヘン戦争以来はじめての完全な反侵略戦争での勝利であり、これによって被侵略の歴史が終わりました。同時にそれは、中華民族の復興の開始ともなりました。中国古代の燦然たる文明は、アヘン戦争以来、外国の侵略を受けて半植民地に転落しました。それ以来、中国人は国家の独立と民族の解放のために闘い続けましたが、ことごとく失敗しました。抗日戦争の勝利によって、中国は独立を獲得し、再び国際社会の前面にたつ可能性が出てきました。このことは中国人の民族自負心を奮起させるものでした。

第五に全面性について。25 年来、抗日戦争の研究は政治、軍事、外交分野から経済、社会、文化、教育の領域に拡大しました。

第六の発展性について。抗日戦争は 2000 年あまりの中日両国の交流歴史と戦後の中日関係の結節点で起こりました。平和は中日両国の交流の主流であり、抗日戦争の不幸の歴史から教訓を汲み取り、今後の平和のために、努力しなければなりません。中国では、歴史を鏡として、未来を向かうということを主張しています。

・ 研究成果について

1980 年代以来、中国では、中日戦争史研究に関する多くの著作と論文が発表されました。以下、主たる成果について、便宜的にいくつかの種類に分けて紹介します。

1) 関連資料集

『中共中央抗日民族統一戦線文件選編』(上, 中), 档案出版社, 1984 年(関連部分)。

『毛沢東軍事文集』(第 2 卷), 軍事科学出版社・中央文献出版社, 1993 年版。

彭明主編『中国現代史資料選輯』(第 4 冊), 中国人民大学出版社, 1992 年。

宋孟源主編『中国国民党歴次代表大会及中央全会資料』, 光明日報出版社, 1987 年。

蔡徳金, 李恵賢『汪偽国民政府紀事』, 中国社会科学出版社, 1982 年。

蔡徳金編『周佛海日記』(上, 下), 中国社会科学出版社, 1986 年。

『中共中央抗日民族統一戦線文件選編』(上, 中), 档案出版社, 1984 年。

『中国人民解放軍歴史資料叢書・八路軍・参考資料』(1), 解放軍出版社, 1992 年。

復旦大学歴史系編『汪精衛漢奸政權の興亡』, 復旦大学出版社, 1987年。

復旦大学歴史系編訳『日本帝国主義對外侵略史料選編(1931-1945)』, 上海人民出版社, 1975年。

中国社会科学院近代史研究所編『胡适任駐美大使期間往來電稿』, 中華書局, 1978年。

また, 中国社科院中日歴史研究センターの重点プロジェクトと一部として『南京大と屠殺資料匯編』が出版されました。

2) 総合研究の成果

軍事科学院軍事歴史研究部編『中国抗日戦争史』(上, 下), 解放軍出版社, 1991年。

軍事科学院軍事歴史研究部編『中国抗日戦争史』(上, 中, 下), 解放軍出版社, 2005年。

第一の研究に比べ, 資料的にも豊富な内容になり, 研究の範囲も広がりました。すなわち文化, 思想, だけでなく中国共産党と国民党の抗戦と矛盾をも論じています。1931年から1945年までを対象とし, 1931年から1937年までを局部抗戦時期, 1937年から1945年までを全面抗戦時期としています。

羅煥章, 支紹曾:『中華民族的抗日戦争』, 軍事科学出版社, 1987年。

胡徳坤:『中日戦争史(1931-1945)』, 武漢大学出版社, 1988年。

胡徳坤, 韩永利:『中国抗戦与世界反法西斯戦争』社科文献出版社, 2005年出版。

前著に比して中国抗日戦争と世界との関係, 相互の支持を強調しています。

何理『抗日戦争史』, 上海人民出版社, 1987年。

何理『中国人民抗日戦争史』上海人民出版社, 2005年。

共産党の抗戦が研究の重点ですが, 前著に比して中国人民の戦いも強調しています。

王輔『日軍侵華戦争(1931-1945)』(1-5), 遼寧人民出版社。

このほか, 抗日戦争史叢書(王桢林主編)が広西師範大学出版社から出版されました(1992-1995年)。また, 九・一八事変叢書が遼寧出版社から, 東北淪陷十四年史叢書が中華書局から, 毋忘国耻歴史叢書が中国華僑出版社から公刊されました。

1990年代以来, 中国社会科学院中日歴史研究センターによる一連の成果, および社会科学文献出版社に出版された著作は, 各面の研究成果を現しています。

3) 戦争と戦場の研究

曲家源『盧溝橋事変考論』, 中国華僑出版社, 1992年。

荣維木『炮火下の覚醒』, 広西師範大学出版社, 1998年。

徐勇『“征服中国”的哀歌——日本侵華戦略』, 広西師範大学出版社, 1993年。

張憲文主編『抗日戰爭的正面戰場』，河南人民出版社。

謝忠厚，居之芬，李鈇虎『晉察冀抗日民主政權簡史』，河北人民出版社，1985年。

李良志『度盡劫波兄弟在——戰時國共關係』，廣西師範大學出版社，1993年

李良志『烽火江南話奇冤——新四軍與皖南事變』，廣西師範大學出版社，1993年。

4) 日本の侵略と傀儡政權

蔡德金『歷史的怪胎——汪精衛國民政府』，廣西師範大學出版社，1993年。

蔡德金『朝秦暮蜀周佛海』，團結出版社，2009年。

蔡德金『討逆集』，蘭州大學出版社，2005年。

黃美真ほか『汪偽“七十六號”特工總部』，武漢大學出版社，2010年。

黃美真『汪偽十漢奸』，武漢大學出版社，2010年。

黃美真『日偽對華中淪陷區的經濟掠奪』，社會科學文獻出版社，2005年。

王鍵『日拋時期台灣米糖經濟研究』，鳳凰出版社，2010年。

王士花『日偽統治時期的華北農村』，社科文獻出版社，2008年。

郭貴儒ほか『華北偽政權史稿——從“臨時政府”到華北政務委員會』，社科文獻出版社，2007年。

宋恩榮主編『日本侵華教育全史』，人民教育出版社，2005年。

謝學詩『偽滿洲國史新編』，人民出版社，2008年。

5) 抗戰の民族性

任貴祥『華夏向心力——華僑對祖國抗戰的支援』，廣西師範大學出版社，1993年。

王真『動蕩中的同盟——抗戰時期的中蘇關係』，廣西師範大學出版社，1993年。

陶文釗，楊奎松，王建朗『抗戰時期中國對外關係』，中共黨史出版社，1995年。

『民主革命時期的民主黨派』，湖南人民出版社，1986年。

6) 翻訳された資料と著作について

服部卓四郎『大東亞戰爭全史』，商務印書館 1984年。

『今井武夫回憶錄』，中國文史出版社，1987年。

日本防衛廳戰史室『中國事變陸軍作戰史』，中華書局 1979年。

安井三吉(史桂芳訳)『蘆溝橋事件』，香港科華出版社，1998年。

西村成雄(史桂芳訳)『張學良』，中國社會科學出版社，1999年。

美國國務院編『美國外交文件(日本 1931-1941)選訊』，中國社會科學出版社，1998年。

『羅斯福選集』, 商務印書館, 1982 年。

(美) 達萊克『羅斯福与美国对外政策(1932-1945)』(上, 下), 商務印書館, 1984 年。

菲斯『中国的糾葛』, 北京大学出版社, 1989 年。

・ 中国における抗日戦争研究機構について

中国における抗日戦争研究機構には, 中国抗日戦争史学会, 北京抗日戦争史学会, 第二次世界大戦史学会などがあります。

また中国抗日戦争史学会は毎年シンポジウムを開催しています。さらに2007年から, 2年ごとに台湾方面とともに海峡兩岸抗日戦争シンポジウムを開催しており, すでに北京で 2 回開催していますが, 将来, 台湾で開くことを計画しています。

中国における抗日戦争研究者には大学の教員, 中国社会科学院の近代史研究所, 日本研究所, 世界史研究所のほか, 各省市自治区の社会科学院の研究員がいます。

現在, 民間の研究も盛んになっています。すなわち四川省の建川博物館, 雲南省の西抗戦博物館のほか, 南京や江蘇にも民間の記念館があります。

・ 今後の研究の発展について

第一, 視野をさらに拡大する必要があります。抗日戦争時期における政治, 軍事, 外交, 経済から, 思想, 文化, 社会, 文学の諸領域に拡大するとともに, 中国の近代化と関連づけた研究が望まれます。戦争は中国の近代化を破壊する一方, 西南, 西北で近代化を促しました。

第二, もっと戦争と戦後の関連性を重視しなければなりません。平和は世界民衆の共通の願いであり, 戦争の教訓を汲み取ることによって, 平和を維持すべきです。さらに戦争による虐殺, 化学兵器などは今日の中国人の生活を脅かし心理的な傷を残しています。

第三, 国際の交流をさらに活発に展開する必要があります。1995 年以来, 中国の抗日戦争の研究は日本, アメリカ, ロシア, 韓国の研究者の交流は盛んになり, 共同研究, 共催のシンポジウムも開催されるようになりました。それは研究の深化のために良好な影響を果たすことになるでしょう。

中国的抗日战争研究：视点与成果

史桂芳

Historiographical Introduction to the Second Sino-Japanese War (1937-1945)
Studies in China: New Perspectives and New Findings

SHI Guifang

摘 要

1985 年中国开始出现抗日战争研究热，至今抗日战争仍然是中国近代史研究领域的“显学”，每年都有大量的研究著述发表。在抗日战争研究中，学者更加强调抗日战争的全民族性、世界意义、历史进步性，研究范围已经从政治、军事、外交、经济扩展到文化、教育、社会等各个方面，研究是广度和深度到达了新的阶段。目前中国国内有许多研究抗日战争的机构。如：中国抗日战争史学会、北京抗日战争史学会、第二次世界大战史学会等等，这些机构注重与海内外学者间的交流，经常举办国际、国内以及海峡两岸学术研讨会，推动抗日战争研究的不断向前发展。今后抗日战争研究将继续扩大研究领域，从中国近代历史发展进程、从中国与世界的关系来探讨抗日战争。

（担当委员：田中 仁）

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>